

## 50 福祉サービスを受ける中途障害者の Quality of Life に関する研究

病院 臨床研究開発部 今橋久美子 深津玲子

自立支援局 小田島 明 小松原正道 四ノ宮美恵子 江藤文夫

【背景】近年、障害者のリハビリテーションにおいて、機能のみならず Quality of Life (QOL) に対する関心が高まり、その主観的評価が試みられている。中途障害者については、障害の原因となった疾病または事故と QOL との関連を横断調査した先行研究はあるが、福祉サービスの利用と QOL の関係について明らかにした縦断研究は国内外でも例がない。ところで、QOL の定義と測定方法はさまざまであるが、Schallock(2004)は、多くの QOL 研究に共通してあらわれる領域を挙げ、感情の安寧、人間関係、物質的な福利、自己啓発、身体的な福利、自己決定、社会参加と人権・法的な権利の7つを QOL の核と考えた。一方、WHO では QOL を文化、社会、環境の中での主観的な評価とし、生活のさまざまな側面に対する個人の認識という多元的な概念と定義している。本研究では、福祉サービスを利用する中途障害者を対象に、利用前後における QOL の変化を明らかにする。1年目の今回は初期評価の結果を報告する。

【方法】福祉サービスを利用する中途障害者を対象に、WHOQOL26 を用いて主観的 QOL 評価を行う。WHO は、QOL の構成領域を身体的、心理的、自立のレベル、社会関係、精神性／宗教／信念、生活環境、の六つの側面に及ぶ概念として設定した上で、国際間比較が可能な包括的 QOL 尺度 (WHOQOL100) を開発した。この WHOQOL100 の利用拡大を意図して開発された短縮版が WHOQOL26 である。いずれも疾病の有無を判定するのではなく、受検者の主観的幸福感、生活の質を測定することを目的としている。

本研究では、福祉サービス利用前後に WHOQOL26 を施行し、中途障害者本人の QOL および領域別得点について変化を分析する。さらに、バーセルインデックスを用いて生活機能評価を行い、QOL との相関を検討する。評価の施行については、自立支援局内の面接室において検査者が本人に質問する。

【対象】2010年11月～2011年10月に国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局で就労移行支援または自立訓練を開始した中途障害者。

【結果】対象者は37名（うち男性32名）、年齢は34±11歳であった。障害別内訳は、高次脳機能障害19名、肢体不自由14名、視覚障害4名であった。生活機能は、身体的 QOL とは弱い相関があるものの、QOL 全体とは相関がなかった。年齢層別では、20代、30代の QOL は標準値より高く、40代は低かった。障害種別では、高次脳機能障害群は肢体不自由群よりも生活機能は高かったが、心理的領域の QOL は低く、具体的には、「毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしているか」「自分自身に満足しているか」という項目の得点が低かった。

【考察】QOL と生活機能は相関が低く、QOL と関連する要因は主に年齢、生活機能と関連するのは障害種別であった。QOL は40代で総じて低かった。高次脳機能障害群では、ADL はほぼ自立しているが、生活や自己に対する肯定感が相対的に低かった。今後、順次1年後のリハビリテーション終了時における変化を追跡する。